

俳人協会々々報

1962年

7月

No. 2

俳人協会

春季総会開く

新会長 水原秋桜子氏に

昨年の十二月、俳人協会の創立とともに創立総会を開いたが当時の会員は顧問五名を含めて合計三十名という小人数の構成だった。その後この構成には多少の異動があったが、創立総会の決定にもつづいて会員拡張の方針をとることになった。新会員の詮衡については清記にある通り「幹事一名及び会員一名の推薦」により「幹事会」で慎重に検討してきたがその結果、ここに春季総会を開くまでに会員数一六〇名を数えるに至った。

五月二十六日午後、東京有楽町電気倶楽部の大会議室で俳人協会春季総会が開かれた。出席者五二名。岸風三樓氏の司会により、議長に大野林火氏を選び、次第に従って会はずめられた。

まず、中村草田男会長立って、簡単に協会発足の趣旨を説明の後、健康上の理由で会長辞任の表明があり、後任会長として水原秋桜子氏を推したい旨発言があった。もともと中村草田男氏は、協会発足当時、発起人会で否応なしに会長に推してしまっただけであり、その後、同氏の病臥等のことがある、一同ひそかに氏の健康を憂えていたものである。ここに満場一致で水原秋桜子氏の会長が決まった。

秋桜子氏の会長就任に関しては、安住氏の経過報告中にもあったように、かねて固辞されてきたところであるが、一同の懇望によってついに快くうけていただくことになったものである。お互いに伝

俳壇始めての

全国俳句大会

出席者数 6700 名
出句者数 1000 名

戦後始めてというより、俳壇では始めての大規模な第一回全国俳句大会は、朝日新聞社の後援で、長梅雨の晴れた七月一日(日)、有楽町朝日講堂で開催された。十二時半、会長顧問始め選者たちが賞品を飾ってある壇上に並び、岸風三樓氏の司会で、協会側を代表して秋元不死男氏の挨拶並びに経過報告で開会。不死男氏は、現代俳句協会側の声明書頒布のため、当協会について誤解する向きもあろうが、反声明を出せば、一部の人を傷

統を重んずる各派の俳人たちがここに融和して相親しみつつ批評しあうという機運が醸成されたことをよろこび、この機会に自分としては力かぎりのことをしてみたいという新会長の挨拶は心強い限りであった。

福田蓼汀氏の閉会の辞によって第一部終了後懇親会に移った。前会長草田男氏の補足的挨拶、顧問山口青耶氏の祝辞があり、あとは一同の自己紹介があつて俳人協会春季総会はありきたりの言葉ながら文字通り和気藹々裡に終わった。(記録責任・安住)

者毎に特選三句、佳作廿句を選び、賞は朝日賞一名、大会賞三名に決定した。続いて、十二時四十五分より、左の順序で講演に移る。

- 1、俳句性雑感 中村草田男
- 2、俳句真偽の説 水原秋桜子
- 3、光太郎と賢治との交渉 草野 心平

草田男氏の講演要旨は別記の通り。秋桜子・心平両氏の講演は「俳句」九月号と十一月号に分載の予定。一人三十分の制限があるので、講師はそれぞれ苦心したようだが、特に日本人には珍らしい長篇型で、永遠の青年的熱弁の草田男氏は「あと十五分、困りますなあ」とあせりながらも、季題の説明を反復しつつ制限一杯で終る。「見事な尻切れとんぼ」と謙遜したが、結論ははっきりつけていた。この頃、後部まで座席が埋る。参議院選の投票日であったのに、参会者はほぼ千名で、俳人の集会としても恐らく最大だろう。秋桜子氏は淡淡と随筆風に、鳥の鳴き真似などを混えた巧みな話術で、東大俳句会当時の回想などをエピソードとして話した。交通麻痺のため、遅刻したので、心平氏の講演は披露の途中へ変更したが、氏は黒袴黒足袋という姿で、無名の賢治がいかにして世に認められたかを、若い頃の自分をも登場させて、いきいきと語った。次いで鷹羽・山田・西山三氏の交代で廿三名の選者に選ばれた計五二九句がよどみなく流れるよ

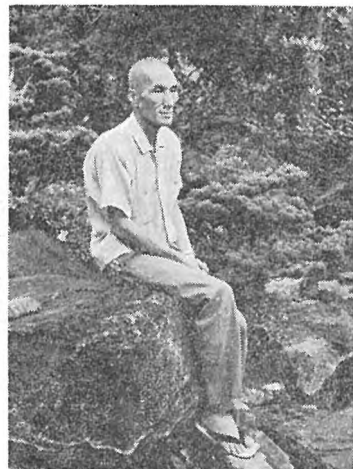
うに披露された。特選句は全部ロビーに掲示したが、それを床にすわりこみ写すという熱心な姿も見られた。次に安住敦氏が、上位入選者の得点と大会賞授賞者の氏名の発表をして、一部の選者の選評に移る。選評者は、林火・波郷・爽雨・汀女・青郁・風生の各氏（登壇順）四時より拍手とフラッシュの中で、会長秋桜子より大会賞と朝日賞が授賞される。授賞の四氏の中、山口氏は鹿兒島という遠隔地のため欠席したが、奈良市から上郡した神林氏、東京都の金盛・平間氏と、三名までが晴れの授賞式に出席できたのは、何よりうれしいことだった。四時廿分、福田蓼汀氏の閉会の辞で終了。なお大会賞の副賞は、大中小三重ねの銀盃で、朝日賞の副賞は、古池の句にちなんだ蛙を金色に浮彫した黒蒔絵の桶である。大会の模様は、当日夜七時のN・H・Kテレビニュースで全国放送され、またスナップと共に、二日の朝日の朝刊に報道された。本大会は俳人協会及び朝日新聞社で年中行事とする予定。終了後五時より有楽町の富士アイスで、授賞者を囲んで選者及び役員らの祝賀兼慰労の夕食会を開き、授賞の感想などを話してもらった。大会の選者は左の各氏でその中、

- 印の十六氏が出席した。
- 飯田蛇笏 ○水原秋桜子 ○富安風生
- 山口青郁 山口誓子 高浜年尾
- 中村草田男 ○石田波郷 ○秋元不死男
- 大野林火 ○中村汀女 星野立子
- 平畑静塔 ○安住敦 ○石塚友二
- 石川桂郎 ○角川源義 ○岸風三樓
- 橋本多佳子 ○福田蓼汀 ○皆吉爽雨
- 長谷川かな女 ○香西照雄(順序不同)

俳人協会賞

癌年齢地の尺蠖に杖をかす

山口青穂



山口青穂氏

私にはこれといった俳歴はない。昭和三十三年の五月頃、某俳人の添削指導を受けたが、その後は我流で続けてきた様

な訳だ。鹿兒島の片田舎で呉服屋を営んでいて、つい仕事の忙しさに追われ、ゆっくり俳句の話をする仲間もない状態で今度の受賞の電報も仕入れの旅から帰って知った様な始末だ。

我流で作っていたから、自分の作品の良し悪しということになると不安だ。人に見られても恥かしくないような作品を作れるまでに何年でもがんばるつもりだが、旅に出る機会も多いことだからこれからは本当に力を入れてやりたいと思う。

俳人協会賞

万緑や神父の歩幅裾中に

神林信一

勤めの都合で転任すること四、五たび東へまた西へと居を移しました。自然と旧蹟とに恵まれた奈良に住んで、佳作を

残したいと思いますが、民族の大きいなる遺産には気圧されがちです。かかる一日、勤務先の窓から眺められる名だた

る山々と、堂塔から目を手近に移したとき、成ったのが受賞句であります。大形（おおぎよう）に構えすぎたいたかも知れないと思っています。

これを機会に精進努力したいと期していますが、今後とも草田男先生はじめ諸

俳人協会賞

雷遠し髪解きて夜は女の身

平間真木子

単音の、しかも常にどこかもどかしい思いの俳句に、いつの間にか深く心魅かれたというのは、いったいどうしたことでありましょうか。

一人の、働き、生きてゆく女の欲びと悲しみ、その一つ一つを静かにしらす。

その俳句がいかにもどかしく、色映えぬものでありましよう、それは所詮わたくし自身の姿に外ならぬと思えば、わたくしはそれを大事にはぐくみ、愛してゆ

先生の御叱正をお願いします。

（俳歴）

昭和二十二年以来「万緑」に投句し、草田男先生の指導を受けて今日に至る。

きたいと思えます。

このほど榮ある受賞に浴し、心から富安先生、岸先生その他諸先生に感謝いたしますと共に、あらたに更に険しい登攀をしなければならぬと存じております。

（俳歴）

昭和三十二年五月、春嶺賞受賞と同時に「春嶺」同人に推さる同三十六年「若葉」同人。

朝日新聞社賞

羽搏きてをのれ驚き羽抜鶏

金盛仁平舎

大正八年、中学五年の頃、従兄の鈴木桃孫に勧められて「ホトトギス」に投句入選したのが始まりだが、仕事の都合で俳句から遠ざかることが多かったが「ホトトギス」と「アララギ」は読み続けて

いた。その後勅使河原良夜選の朝日新聞

城北俳句欄に刺戟され、去年の四月良夜氏が会員である「若葉」に入会した。昨年の五月か、風生先生の喜寿祝賀俳句大会に初めて出席し、

喜寿祝ぐとむらさき長き藤活けぬ

が特選に入った。こんどの入選と共に

感銘深く、今後とも努力したい。



平間真木子氏 神林信一氏 金盛仁平舎氏

俳句性雑感《講演》

中村草田男

「或る思想の代弁者の数が少ないのは、その思想を説くことが危険な場合で

はなくて、その思想を説くことが退屈な場合である」という趣旨のことを、ニ

チエが言っています。或る事について鬼面人を驚かすような飛躍した理論を、通用するかどうか、その結果がどうなるかも考えず言いとばすのは、勇敢には見えないが、これは、ニーチエのいう「危険な場合」に当たります。「俳句性」については、俳人の皆さんが直感的に体験の上で分っている、それをこと改めて再認識という意味で話すのだから、聞く方では、「今更、退屈だ」と思うでしょう。しかし、俳句性という根本点からのアッピールということで、俳句は時代と共に進展するのです。退屈という理由で止めるわけにはゆきません。

昭和の始めに盛んだった新興俳句は、現在の前衛派がそうであるように、伝統を無視して感情なり理智を自由に表現すればよいのだという危険な議論をしました。それに対し、虚子先生は「立子へ」(「玉藻」所載)という文章の中で、「ロシアでは多くの文学者がまず社会革命の思想を浸潤させ、それが土台となって社会が革命された。しかし、俳句は自然を対象としてそれを写す。その対象の自然は永久に変わらないものだから、俳句では革命というものはあり得ない」という趣旨のことを書かれたのです。私はこれを読んでヒヤリとした。俳句性は根本的には不変ということを言っているのだが、直感的な言い方で、論理的ではないのです。文学のような作者の内側からする変革と進展は、外からの政治革命とは違う

のです。たとえば、月並俳句に対して、子規が「写生」を唱えたが、これは言ってみれば「内からの革命」です。虚子先生の発言は、子規の変革も、さらにそれを継承した客観写生・花鳥諷詠論への進展をも自から否定したようにとられるのではないかと、ヒヤリとしたのです。俳句は自然を中心にした季節を俳句の本質として失ってはならないということをおうとしたのに違いないのですが、自然は不変だから俳句も不変だという言い方が誤解を招きそうだったので。俳句は、俳句性という不変の方途を踏まえつつ、作者の内側からの変革で、時代とともに絶えず新化してゆくべきものなのです。

さつき秋元さんが読まれた声明の一部のように、現在は俳句性があいまいになり、見失われる恐れのある時です。前衛派が、俳句性を離れて自分の自我や意識だけで何か新しい実験をやるうとしているが、これは或いはやれるかもしれない、その代り危険を冒す恐れもある。それなのに、そういう実験的作品の達成度を見きわめもしないで、自分では季や俳句性を否定しない者たちが、そういう作品を、現状の未完成のままかばい、集団的に肯定しようとする。また、実験の当事者は、伝統の克服と称して、十七音のみに、俳句性があると主張する。あたかも多数が否定しないような外観を呈しつつ、うやむやの中に俳句性が否定され

てしまうという危険な結果になりかねないのです。それで、われわれは、一見狭く限ったようだが、俳句性という母胎を守ってゆくために、同志相寄って「俳人協会」を創立したのです。(俳人協会設立の趣旨については、十二月四日の朝日の私の「俳壇時評」を参照されたい。)

明治末の新傾向でも昭和の新興俳句でも、言葉の尊重は忘れず、意味を通じさせることは守ってきました。ところが今度の前衛派は、言葉の伝達力を過信して破格な言葉使いをすれば、新表現になると思ひ、けっきょく伝達不能におちいつています。

さて、本題の季節が俳句性の中心をなすということですが、俳句はあまりにも表現のスペースが短かいから、感情・心理・思想を十分に叙述できない。それらを叙述しても、ほんの断片に過ぎない。それでこの短所をひるがえして、かえって長所たらしめるのが季節の役目です。つまり作品の表面には「季節」を中心にした具体的現象のみを描いて、しかもその季節の背後には作者の内的要素——感情・心理・思想をそれとなく封じ籠め滲透させるのです。われわれ日本人は、四季の変化に支配される風物や風土の中に住み、生活意識も季節に支配されているので、象徴化された季節を通して、作者が暗示しているゆたかな内的要素を鋭敏に直感連想できるのです。だから、季節は俳句をして短かいながらも奥行きのある

立体的なものとし、長い文章と同じく鑑賞に堪え得るものにするのです。このことを朝日の時評で、季節の用は、「自己の感情と思念とに具体性を付与せしめて、作品中に定着させ得る」と要約しました。この私の論に対して、村野四郎氏が季節の必要性を認めた上で、「そのように単に方法論上の消極的ファクター」としてのみ考えず、「俳句を生み出す根原的な意識」として積極的に考えるべきだ。その意識は、「我もまた世界を形成する一事件にすぎないという謙虚な存在意識にはじまり、それをもって、自然がそのままコトバないしは思想と見えるような暗喩あるいは象徴の深みにまで降りてゆくのでなければ、その本来の使命は生かし得ない」(「俳壇の危機」朝日新聞)と言っています。また、若い世代は世界的立場で新しい詩として俳句を作ろうとしているから、方法論としての効用を説くと反撥されると評しました。後者の世界的立場に立つことは私も人間としては念願しているし、また、そうあるべきだと思ひます。また、戦時中から「万物中の一物としての人間」という考え方で、季節とのかかわり方を考えている私には、村野氏の「謙虚な存在意識」というのも賛成できることです。(これについては、後述)しかし、この際、季節がこういふ日本人独自の人間ないし自然観に根ざしていると言えば、「自然には関心を持たない。今や人間観だけが問

革と進展は、外からの政治革命とは違う

つつ、うやむやの中に俳句性が否定され

は俳句をして短かいながらも奥行きのある

は関心を持たない。今や人間観だけが問

題だ」と主張する前衛派は「象徴としての自然」を理解せず、自然を愛し親しむ自然愛ぐらゐにとつて、世界的立場のみから、季節ないし俳句性を否定する根拠にするだろふと思つたので、彼らと同じく世界人としての自分の人生内容を生かす時にも、この短詩形では季節を活用しなければならぬと効用論的に言つたのです。それから、金子兜太氏が、自然に関心を持たない、人間本位だと宣言した時、東京新聞の「大波小波」欄に、誰だか知りませんが、「俳句における季節」というものは、或る個人、その生活、あるいはその生活感情が、實際この世の中に存在したのだ、経験としてそこにあつたんだという確証になつてゐるんだ。その人だけがすばらしい感情経験や生活経験をしたというのではなくて、もう一つ大きな世界の中へ置いて、しかもそれらが成りたつような確証になつてゐるのだ」という趣旨のことを書いていたが、これは村野氏の論旨と同方向のもので、正しいと思ひます。今の俳句や今後の俳句に対して、根本を突いてゐると思ふのです。

時間がないので、結論的に言ひますと季節というものは、矛盾点です。何故かという、季節に忠実になると、叙事詩的に自然を写す方へ傾むき、自己内容あるいは人間内容を表わすことを忘れてしまふ。反対に、人間内容を表わす方を中心にすると、季節が抵抗になつて、ほん

のフラグメントしか表わせないうような気がする。しかし、俳句は極端に叙事詩であるのだが、しかも作者の内的生命が生かされなければ詩ではあり得ないので、一方では抒情詩ないし思想詩でなければならぬのです。つまり内的要素と外的要素、披情と抒情との矛盾の中心点が季節なのです。また、次のようにも言ひます。個人の感情とか意識とか自我そのものだけで成りたつてゐては、実際にはかないので、それらを自我とか個性とかいふものの存在を無視するぐらゐに、大きな冷徹な自然界の中に置いて、そこにおいても、なお真実であるとの「ゆるされ」を得るところまで持つてゆく。放埒に動く感情のみを十七音に書きつけるのではなく、冷やかな世界へそれを置くのです。自然というものは、われわれを慰め樂しませる面も持つてゐるが、反面冷たい面も持つてゐます。「俺が死んでも誰鳴くものか、山の鴉が鳴くばかり」という唄があります。また、ロシアの百姓が「俺が死んだつて、そのために木の葉一つ落ちるということはない」と言ひてゐます。万物の霊長と思ひあがつて、しかもその中の一人が天才意識で以て、情感や思念だけを表わすのではなくて、それらを一度冷やかな自然界の中に置いて、人間も自然の一部だということを認識する時、人間も自然の中のあらゆる相対物と同じなのです。分りやすく言う

と戦争に勝つべく一生懸命にやつてゐても、自然は日本人のために動いてはくれない。自然は何時と同じようにおごそかに進行するのみです。平畑静塔氏の俳人格説は、俳句の性能に従つてゆくと、俳人は遂に人間の内部意識や意願と無縁に、ただの一客観的事実として戦争すらも雲烟過眼視してゆくようなことにならざるを得ないといふのですが、これは俳句性の持つ一面——あらゆるものの客観化といふ面をハッキリ掴んでゐます。といつても、人間としては戦争を雲烟過眼視していつてはいけぬ、戦争への人間的な反応といふ自己内容がゆたかに俳句にも生かされねばならないのです。だから、俳句は一旦自己を突き離し没却し客観相に密着させ万物中の一物という冷徹な場をくぐらせてレアリチイを与え、けつきよくはゆたかな自己内容を生かす——つまり自己を捨てて自己を生かすといふことで、これが象徴といふことです。そして、そのためには冷静な傍観の目と暖かい心という矛盾した二つのものが必要で、この二者が矛盾でなくなる境へ突き入るべきです。

空気の抵抗があるから、空を飛べるので

カントが「必然性と自由」ということについて、たとえ話をしています。鳩がそのへんを飛びながらはざいた。「俺が自由に飛ぼうと思つてゐるのに、空気というものがあり風となつて当るから不自由だ。空気さえなければ、俺は自由に飛べるんだが……」いづくんぞはからん、空気の抵抗があるから、空を飛べるので

す。季節はたしかに抵抗になります。特に、自分一人のちいさい思念や感情をそのまま生かすのではなく、万物中の一物という冷徹な場所へ持つてきて、それらを生かすということには非常な抵抗があります。矛盾点としての抵抗です。この抵抗を体あたりで突き抜けるということができないならば、今後世界人としての人間として新しい俳句を作つてゆくことはできないのです。邪魔物であり矛盾点である季節そのものが、かえつて、短詩形を非常に奥行きのある暗示に富んだ立体的な世界にしているのです。「自由」といふのは何もかも束縛を捨ててしまふところには在るのではなく、束縛を価値ある「必然性」へ転せしめるところに在るのです。圧迫され盲従する時には「矛盾」と見えるものも、その圧迫を乗り越えきつた時にはかえつてその矛盾が、われわれを「自由」に活動させるのです。たとえば、われわれは皆、自分の性格の一面の故に悩んでいる。言わなくてもいいことを言つたり、しなくてもいいことをしたりして後悔してゐる。しかしその性格の底に、またその性格の故に必然性があるのです。その一面をネガティブな方面でなく、ポジティブな方面へ生かした時に、その人が世の中に生きてゆく自由があるのです。だから、自由は季節の中にあるのではない、それと一緒に冷徹な世界で鍛えられつくした時にこそ自由があるのだと思ひます。

(注) 講演の速記から講師の意図へ忠実に要約しましたが、直接の文責は要約者の香西にあります。なお、草田

講演 草野心平氏



男氏は、さらに詳細な俳句性論を近く「万緑」に載せる予定。

俳人追加会員名簿

七月二十五日現在
現在までの会員数 一七六名

俳人協会々報
(昭和三十七年七月
第三十七号)
編集兼発行人 大野 林火
印刷 人 竹内常治郎
東京都千代田区
富士見町二ノ七
俳人協会
電話九段側〇一一一番
振替東京 二七三番

- 岩崎 健一 東京都江東区深川門前仲町一ノ七
- 有 働 亨 東京都渋谷区猿樂町二ノ一三二
- 大高 弘達 東京都世田谷区祖師谷二丁目一六一
- 島田 萌子 東京都大田区北千束町四二七
- 岡田 日郎 浦和市元町一ノ一〇四 グランド荘内
- 岡間 啓二 川崎市北加瀬二六六
- 加畑 吉男 市川市曾谷町一〇三七
- 清崎 敏郎 東京都世田谷区玉川町二二四五
- 坂本 波之 東京都練馬区下石神二の一六三九
- 清水 一 東京都文京区西片町一〇二ノ七
- 庄中 健吉 横浜市西区西戸部二ノ一三五
- 菖蒲 あや 東京都墨田区吾嬬町西四ノ六六
- 鈴木 杏一 東京都文京区西片町十はの一
- 千代田 葛彦 東京都葛飾区下千葉町六六
- 戸川 稲村 鎌倉市打越二〇二二
- 中村 春逸 東京都世田谷区松原町三ノ一二四
- 長 倉 閑山 東京都杉世区香掛町二六四
- 成瀬 桜桃子 埼玉県入間郡富士見村鶴馬一二一七ノ二五
- 林 翔 市川市菅野町三ノ一一二三
- 平間 真木子 東京都大田区下丸子町一三八
- 細川 加賀 千葉県鎌ヶ谷局区内初富運輸省初富住宅59号
- 丸山 海道 京都市中京区釜座通夷川上ル
- 三好 潤子 大阪市西成区天神森二ノ五九

電話(32)二二三九

電話玉川 七六九
電話(96)一五九七